を、表しているのではないかということを述べた。

葛飾の真間手児名伝説歌
――山部赤人作歌の視点から――

鈴木加世子

関東の下総国に伝わっていた真間手児名伝説について、集中で詠まれている山部赤人の歌（三・四三一～四三三）や、高橋虫麻呂の歌（九・一八〇七、一八〇八）、東歌に収録されている二首（一四・三三八四、三三八五）の中でも特に山部赤人の詠んだ歌に心惹かれ、本稿で、その山部赤人歌について、諸注釈書『萬葉代匠記』『萬葉集略解』『萬葉集古義』『萬葉集新考』『萬葉集全釋』『萬葉集總釋』『萬葉集評釋』『萬葉集全注釋』『萬葉集私注』『萬葉集注釋』『萬葉集全注』『萬葉集釋注』の解釈すべてを句単位でみるとともに、そこから導き出される歌の意を考察した。

結論として、高橋虫麻呂が伝説の真間の手児名を、想像とともにその美しさをありありと詠い、彼女の姿を鮮明にさせたのに比べ、山部赤人が伝説の内容の詳しい描写をせず、ただ彼女の墓所を見てその感慨を詠い上げたのは、はるか古の真実のわからなくなってしまった真間手児名伝説を、歌による伝説の余計な脚色を避け、「手児名」という古に存在したという一人の名高い美女に対して鎮魂の意を込め、伝説の内容の埋没をはかなみつつ、当時を偲び詠われたものだと私は解釈した。

山部赤人と文芸
――登神岳作歌をめぐって――

船尾　清香

本稿は『万葉集』巻三にある「登神岳作歌」を取り上げ、赤人について改めて考察することを試みた。この歌は一般に、明日香古京に対する懐古の情をうたったものであると考えられている。それは、もはや定説と言っても過言ではない。しかし、ただの「明日香古京に対する懐古の情」を詠んだものではなく、赤人の「遊び」がうかがえる作品ではないかと思われた。

赤人の活躍した万葉第三期の時代環境を考えると、あえて行幸などの場で遊びの要素的に恋歌の歌句を入れることはなんら不思議ではないと思われる。当該歌では人麻呂に見られる典型的な国土讃美的天皇讃歌を踏襲し、一見すれば明日香古京に対する懐古の情や、いにしえをしたう気持ちを詠んだような歌を作りながら、「見るごとに　哭のみし泣かゆ　いにしへ思へば」と詠みこみ、さらに反歌では恋歌を詠むことが、赤人にとっての遊びであり個性である。そして、金村や千年との詠風の違いとして、純粋に相聞の私情を詠んだのではなく、あえてだまし絵的に詠むのが赤人であり、このことこそ世に自然歌人と称された彼の新たな芸の「技」とでもいうべきものであると思われる。他の作品においても、人麻呂の歌句を数おおく踏襲しながら、決して同じではない、赤人オリジナルの作品ができるのは、彼の個性、そしてすばらしい芸の技の表れであろうと考えた。